

2012年に当研究所が実施した「幼児期から小学1年生の家庭教育調査」(*)では、人の話を最後まで聞く、相手の意見を聞く、物事に挑戦する、自分の気持ちを調整するなどの力がその後の「学びに向かう力」の土台になることが明らかになりました。「学びに向かう力」を、幼児期にどう育むかを考えます。

*調査結果はHPをご覧ください。▶▶▶ <http://berd.benesse.jp/>

第2回 「あきらめずに挑戦する力」を育む

イラストで見ると「あきらめずに挑戦する力」が育まれた状態とは？

Aちゃん
5歳・冬～春

Aちゃんのクラスは、みんな投げこまに夢中です。クラスのほとんどの子はこまを回せるようになりましたが、Aちゃんはやっとひもを巻き付けられるようになったところで、まだうまく回せません。そんなある日、クラスの担任が「1週間後にこま回し大会をしよう!」と提案。みんなは大喜びで、大会に向けてさらに練習を始めました。Aちゃんは「大会の日までに、どうしてもうまく回せるようになりたい」と強く思い、こまをよく回せるBちゃんに「どうすれば回せるの?」と尋ねました。BちゃんはAちゃんに一生懸命教え始めました。

担任の言葉にそれぞれやる気を高めたふたりは、さらに練習を続けました。すると、降園間にAちゃんのこまは少し回ったのです。

練習するふたりを見た担任は「Aちゃんは回せるようになりたいたい気持ちで自分からBちゃんに聞いたんだね。そうやって人に聞くことは大事なことだね」「Bちゃんもわかりやすく教えているね」と声をかけました。

担任の言葉にそれぞれやる気を高めたふたりは、さらに練習を続けました。すると、降園間にAちゃんのこまは少し回ったのです。



1 2
3 4



ふたりは喜び合って担任に報告に行きました。担任は「ふたりの力が合わさって成功したんだね。Aちゃん、こま回し大会が楽しみになってきたね」とふたりの努力を認め、Bちゃんは「また明日も練習しよう」とAちゃんを励まします。

翌日もふたりは練習を続けました。Aちゃんのこまが回る度に、Bちゃんは自分のことのように大喜び。Aちゃんもうれしそうに、さらに練習を続けました。



先生とBちゃんが励ましてくれたから、あきらめないでがんばれたよ!



めあての強さと周囲の支えの中で育つ力

あきらめずに挑戦する力をもつことで、自分がめあてに向かって取り組んだことを実現し、大きな達成感を得ることができます。この達成感は次の挑戦、そしてその後の育ちにつながる重要なものです。

あきらめずに挑戦する力の育成には、自分自身のやりたい気持ちやめあての強さが大切です。めあてが強ければ、試行錯誤しながらも、目標に向かって集中して取り組めるからです。しかしそれだけではなく、周囲の励まし、支えが欠かせません。こま回しに挑戦するAちゃんにとって、担任とBちゃんふたりの励ましが大きな支えになっています。特に5歳頃になると、保育者からの声かけ以上に子ども同士の励ましが重要になります。

「あきらめない」というと、我慢する精神力のように思えますが、それだけではありません。子どもの中の「やりたい!」という明確なめあて、そしてまわりの人の励ましや支えの中で、やり遂げた結果として育まれる力なのです。

「あきらめない」というと、我慢する精神力のように思えますが、それだけではありません。子どもの中の「やりたい!」という明確なめあて、そしてまわりの人の励ましや支えの中で、やり遂げた結果として育まれる力なのです。

●「あきらめずに挑戦する力」が育つために必要な経験

- 0～2歳：同じ動作を繰り返すような遊びに夢中になりながら、自分が好きなことを好きなだけやっていいという安心感を体験する。
- 3歳：自分の行動に固有の意味づけをしてもらい、していることがおもしろいと実感する。砂場で団子を作っているときに「そのお団子は、Cちゃんが好きなきなこのお団子だね」などと声をかけ、行動を意味づける。それが「自分はこうしたい」というめあてをもつことにつながる。

- 4歳：「こういう遊びをしたい」という自分なりのめあてが明らかになる。誰かがいると楽しい、自分が受け入れられていることが実感できる体験をし、一緒に関わっていく楽しさを味わう。
- 5歳：自分のめあてをもって、周囲の励ましで挑戦し、達成感を味わうとともに、友だちと喜びを共有する体験をする。



適正なめあてと温かな人間関係、保育者のスキル面でのサポートも重要

3～4歳の頃は、簡単なめあてから得られた小さな満足感の積み重ねが大切です。しかし、年長になれば、ときには「あなたたちならもっとすごいことができるはず」と、育ちに応じて高い目標を子どもへの信頼感とともに提示することも必要です。そうして「やりたい!」という目標が見つければ、「今は大変だけど、がんばろう」と自覚的に行動するようになります。もちろん、高い目標であれば、すぐに達成できるとは限りませんから、保育者が「ここまではできたね」とそれまでの努力と成果を認め、次の方向や方法を示すことも大切です。また、喜び

を共有できる温かな雰囲気クラスの中に培っておくことも、この力の育成には欠かせないと言えます。そして同時に、こま回しのような技能が求められる遊びでは、回すための原理を保育者が十分に理解し、コツをわかりやすく説明することもときには必要です。大人であっても、いくらがんばってもうまくいかない事柄に挑戦し続けることはできません。その子がどうすればうまくいくか、その要因を保育者が一人ひとりに応じて先に見通しておくことも大切でしょう。

